

水源禅師法話集 25

(2013年10月13日 忍野合宿)

2014年11月23日

一乗会



水源禅師のクティの湖にいる水鳥

目次

水源禅師法話.....	1
慈しみ（愛）とは.....	1
形にとらわれず、自分に一番合った坐り方で.....	1
パオ森林僧院の言語問題.....	3
五戒—不飲酒戒と薬酒—.....	4
五戒—Intoxication—.....	5
無明である世俗の考え.....	7
自分の体を指針とする—偉人たちの体感—.....	8
仏法の偉大さ—お釈迦様、アングリマーラ、マハーカッサパー.....	11
命懸けの仏教—水源禅師の求道体験—.....	12
言葉にとらわれる恐ろしさ.....	13
質疑応答.....	15
仏教に出会ったバッハ演奏家.....	15
間違ったことを教える人も信じる人も大変なことになる.....	15
次の世で善い世界に行くために—無明に惑わされず、全て自分で検証する—.....	19
常識は常識ではない.....	21

慈

「慈しみ」という意味は、漢字を見れば分かるように、「くさかんむり」の「くさ」というのは、実は美しい「艸」に「糸」二つで「心」。だから、昔の言語を見ていけば、もっと明快に分かるのですけれども、現代になれば抽象化されて、ぼやけてしまいます。だから、中国にはトンパ文字というのがあります。四川省でなく雲南の山奥に、その昔の絵文字で書いていくという言葉があります。非常に興味があって、その言葉を見たら「見てすぐ、そのものを絵に書いた言葉」ということで、漢字とは違うのですけれども、漢字も実はもともとそうできていました。「馬」は本当に字が馬形に見えるように、馬そのものみたいに、昔の本当の原点に書いてある。というふうに、私たちは時代によって、どんどん変遷されて、美しい形になってきたのですけれども、本当の原点に帰れば、そのもので非常に分かりやすい。だから、昔の人は、その「愛」ということがすぐに分かった。「慈悲」の「慈」という。

現代は非常に「LOVE」という、混同して難しい言葉になっていますけれども、そこから見てメッタ (mettā)、マイトレーヤ (metteyya)。ジーザスがここを目指したという。これはブラフマ・ビハーラ (brahmavihāra：四梵住) の最初のメッタ (慈)・カルナー (悲)・ムディター (喜) の一番大事なところ。けれども非常に難しいから、その我。だから、二つが一つになれば無我でしょう。私もあなたもないのだから。非常に簡単なことだけれども、なかなか難しい。「捨てる、捨てる、捨てる、捨てる」と、何を捨てるのか。何だろうって。それこそナゾナゾ。だから、そこをずうっと観ていく。だから、人生で「慈しみ」ということは、大切です。花を慈しむ、それでもよいし、ワンちゃんを慈しむ、妻を慈しむ、その「慈しみ」は、お釈迦様が「これはこれではなく、全て同じ同体である」ということを言われています。それを「大きな愛」とか表現していますけれども、「大きな愛も小さな愛も、愛は愛で同じ」です。そういうことを感じましたので、楽しくがんばってください。

形にとらわれず、自分に一番合った坐り方で

大変な驚きで、皆さんがすごい超スピードで進化していくもので、こちらの方がびっくりしています。基本はとても大切ですけれども、全てが基本というわけでもないです。「坐り方」

も、また基本はとても大切ですがけれども、それが 100%ではないのです。

私が自分の足が痛いからか、そうなのか知らないけれども、なんでこんなきつく結跏でやらなければいけないのかと。これはまるで地獄の中に入ったみたいだと（笑）。「3 カ月間だけは修行してくれ」という母の命令で坐禅して「あー、3 カ月これで解放だ」なんて思ったから「いやー、一生続くよ」、「えー、一生って？」とびっくりして、何だか知らないけれども、そのままずっと続いて今に至るのですけれども。なぜ坐禅したかと言えば、カナダはキリスト教の国でしょう。そのときは仏教といっても西本願寺さんと日蓮宗の方で、ほとんど日系人のために造られたお寺、あとは中国系もあるのでありますが、日本のお寺さんの方が強かったのです。今は逆転して、中国とかいろいろ入ってきていますけれども。

うちのお母さんは真言宗をやっていたもので、とっても弘法大師を尊敬して、ここはそういう密教の道場はないし、できないから「お前は坐禅をやれ」と。そういうことで始まったのです。といっても不可思議なもので、この深い道にたどり着けたのは、やはり弘法大師様の導きで、特に最大のご恩は、もちろんお母さんですが、女人堂の先生なのです。その昔、女性は奥の院には入れなかったのです。そこで女人堂の先生が、なぜか私を見て気に入って、西陣織の紺の絹に金糸で『般若心経』が書かれた「これをあなたにお土産としてカナダに持って行ってください」と。『般若心経』は聞いたことがあるけれども、書いてみて、「ワーこういうものが世の中にあるものか」と。ということが、仏教の扉を開けさせてもらったわけですね。それでまた、その方が不思議な体験をされて、すごい商人の娘さんと結婚を一回もしないわけですね。その因縁のお話をずうっとして、確か「お地蔵さまに助けられた」と言ったのです。夜、大金を持って歩いているときに、お地蔵様のお堂に逃げ込んだら、その強盗がその扉を開けて！ 通り過ぎて命拾いして、それからずうっと仏道をやって女人堂を守ったという。そういう実際の体験の話とか、どんどこんどこ入っていったわけなのです。

いろいろな旅の話はしましたけれども、そういうふうに「なんでこんなきつい地獄みたいなことをしなければいけないのか」と思いながら、ずうっとやって行って「では、足の悪い人はどうして坐ったらよいのか」とかもう随分、考えたわけ。「では、私だけよかったら、他の坐れない人はどうなるのだろう」とか。まあそういうことの旅でもあったわけ。そしてパオ森林で見たら椅子に座って瞑想している人がいたわけです。なぜかという、腰が悪いからできない。「あー、それなら、このように座ってもよいのだ」ということ。南伝では、こういう結跏ではなくて半跏もほとんどしないのです。左右の足を組まない方法でやるわけです。なぜかという、長時間の意味があって、それで特にこういう坐り方（あぐら坐）をするわけですね。「あら、こういう坐り方でもよいのだ」と。そうでなければ、こっち痛かったら、またこっちとか。こういう坐り方。だから、南伝のお坊さんはよく女性の横座りをしています。

そういうことでカナダに行ったら、人は椅子の生活で、ほとんど坐れないのです。それでは「この人たちには、どうして教えたらよいのか」と。「ソファに座っても痛い」と、それで寝る臥禅（がぜん）。禅というのは座る、それから立つてする禅、それから歩行禅。最初、私がパオを終わって今度カナダで教えるときに、「どうも寝る禅というのは、お釈迦様に失礼

でないのか」と、とても悩んだけれども、後で見たら、私の体験でもそうだけれども、実は「寝る臥禅」でずうっとやれたら、これが最高なのです。ただ、眠りに入ってしまうから、それに皆で場所も取るし。ところが、一番成功したのは、音楽を聞かせて「寝る禅」をさせたわけですね。これがほとんどの人を非常に進化させて、ある程度したら元に戻すけれども。私はもちろんこう坐って、私の念波・エネルギーを与えるのだけれども、心が進化してくれなければ、いくら形だけやっても、結局、何のために坐ったかという。

あるお坊さんが禅で非常に有名な宗派の方で、パオに来て「私はここに3年いて、坐って修行します」と。「日本の美しい坐り方を見せてあげるので」ということで、ずうっと頑張っていて、一年後に彼から発した言葉は「野球のイチローさんはどうしている?」「美味しいものを食べるのに、もう日本に帰ります」と。結局、何も観えなかったわけ、ただ坐って帰っていったわけです。というふうに、形にとらわれて、形だけだから、特に「何か観える、それは非常におかしいことだ」と言うのだけれども、パオでは観えなければいけないことを逆に否定して、ただ坐っていたわけ。というふうな教えなのか知らないけれども、結局、1年間、無駄にして。18年間、坐り続けた方でも、結局、考えにとらわれて、ニミッタ（丹光、禅相）のニの字も何も観ないで帰って行ってしまいました。日本でも18年間、坐り続けるお坊さんは、めったにないみたいです。山に入って籠もって、それでそうなのです。だから「形にとらわれる」という恐ろしさがあります。

「全部、壊す」ということではないのですよ。ある程度バリエーションがあるから、基本は基本で「自分に一番合ったやり方でやってください」と。以前はパオの瞑想法（お釈迦様のダンマヌパサナー〈法随観〉）は知らなかったけれども、私はこういう方法で、ずうっと数10年やっていた。これだったらラクラクに長時間いけるからね。結跏でやる場合は、やはりプレッシャーが来て。本当の（結跏の）坐り方はこうなのです。ここ（太ももの付け根）にくっつけるのです、ここまでヨガみたいに。両足をこうくっつけるのです。グウッと絞るわけ。そしたら取れないから。これをやれば2時間、3時間できるみたい。ただし、ここにハンカチーフか布をここに挟むわけ。そうでなければ、骨と骨が当たって、ものすごく痛くなるから。というふうに、韓国のお坊さんは、これでよく坐れるのです。でも、頑張りすぎて、やはりほとんどニミッタ観ないで帰っていつちゃう、グウッと力が入り過ぎて。結局、音楽の糸みたいに強くてダメ、弱くてダメ。ところが、ピーンと坐れば、かっこいいから、ピーンと張っちゃって、結局うまくいかないような感じでした。そういう人たちは10年、20年、坐っているのです。それでも、そこが絶妙なところなのです。

パオ森林僧院の言語問題

だから、一人一人ガイドして事細かに教えなければいけないのだけれども、パオのときはいつも1200、1300人のお坊さんとか修行者がいるからね。だから、教える方もパンパンパンと言うだけで「はい、できた、できない」「はい、できた、できない」と、それだけで、細かいことは教えられないしね。それで、特に日本から行く場合には、その言語問題がありますからね。英語で教える先生は私が行ったときはただ一人。私と一緒に、ほとんど同じく終わ

った人が、英語で教えているけれども、私が教えてくれた先生は、もうほとんど教えない。何か重要な人にだけ教えるそうです。そういう状態で、ほとんど本当に教わるという状況ではないのですね、言葉の問題があるから。それも英語は「British India English」なのです。そのとき英国が統治したものだから。「English English」ではないのです。だからミャンマーは、その系列を使うものだから、私が聞いても分からないわけ。

それで、ミャンマーの人で英国の医学部の教授の人がいて「これは何を言っているの？」と聞いたら「こうこうこうで」と、「あ、なるほど」と。英語を使っても、これくらい違うのです。だから「私の読んでいる経典」（パオで使われている教科書）は、アンゴラ出身のアフリカ英語で書かれて、「African English」と「British India English」と「ミャンマーの方言 English」が合わさっているものだから、英語国で生まれた人でも理解できないのに、まして日本の方が行って、すぐに理解するということは不可能に近いことです。

今もスタンダードに理解するのは非常に苦勞すると思います。特に宗教経典だから、無理に近いことです。結局、日本にいて通訳を受けても、ミャンマー語で日本語に言われても、どこまで本当なのかは非常に難しい問題だと思います。私みたいに英語で直接やっても、これくらいの障害がある。これは現代に始まったことではなく、お釈迦様の時代にも、これを繰り返していたのでしょう。巨大な壁を偉大な体験者だけが、かみ砕いて、それぞれの時代に伝えていってくれたのではないのでしょうか。

五戒—不飲酒戒と薬酒—

ということで、何をお話ししたいかと言えば「五戒」「五つの戒を守らなければいけない」と。特に「お酒は一滴も飲んではいけない」というふうに解釈されていますけれども、実はちょっと違うのです。私が修行しているときでも、ミャンマーのお坊さんたちは「おいおい、来てこれを飲まないか」と。ヨーグルトが少し発酵したお酒みたいなのですよ。それをやれば体がスツとよくなるから、お酒ではないですよ。発酵していて、そういうふうに体の疲れを取るために飲むという。それで、あちらの漬物にも、食べたらアルコールがあるわけなのです。厳密にそうやってしまえば、それもダメなのです。でも、あちらの人が「これは漬物だから」というふうに、またそれが発酵材ということで、体によいみたいです。お釈迦様のときに「お酒を飲むな」と言ったのは、お釈迦様が説法しているときに「お祭りだ」ということになって、若い女の子たちがお酒を飲み始めるわけだ。舞台に行って楽しいと。そのうちに酔っ払って、ドンチャン騒ぎみたいに踊ったり歌ったりするから、それから「やめなさい」となったのです。それで、それがきつく締められて現状に至って「一滴のお酒もダメ」となっているけれども、私が仏道に入るときに、私の先生に「禁酒でしょう？ 飲んだらダメでしょう？ だから私は仏教しません」と。「まあまあ薬として飲みなさい。それだったらよいから」と。「ああそうか、薬として飲むのはよいのか。それだったらしましょう」ということになって。

今回、クティを造るときに6カ月間、休みなく働いて、不思議なことで家の方も洪水でやられて、二つ家を同時に修理することになってね。もう日本に来る2週間前に、足の付け根

が夜震えて痛くなってグワーンと。それで私の先生が言ったように「焼酎」小さい小瓶の半分と熱い「お湯」コップ一杯で混ぜて飲んで、チビリチビリやって寝るわけ。そうしたら、スッと痛みが取れましたね。だから、年取ってやれば、大変なことになると初めて分かったわけ（笑）、無茶してドンドコドンドコ働けば。そういうふうによいもので、薬があればスッと取れてしまうということ。

五戒—Intoxication—

解析したいと思ったのは、第一に、英語では「不殺生」が「No harming living being」、生き物に対して害を加えてはいけない。第二に、盗んではいけない。「Don't steal」（不偷盗）。それから第三、「No sexual misconduct」（不邪淫）、「嫌だ」と言う人を無理にするとか、愛も何も関係ないのに無理やりやるとか、そういうことをしてはいけません、ということ。それから第四は「No lying」（不妄語）、嘘ついてはいけませんと。第五は「No intoxication」（不飲酒）。「Intoxication」というのは、麻薬をたくさん飲めば Intoxication。それから、これが楽しいからといって、ダンスダンスと夢中になるのも、これも Intoxication。それから「あー嬉しい」と、正気を失ってダーッと騒ぐでしょう。これも Intoxication。それから「あー嬉しい嬉しい」と言って、走り回って「勝った！勝った！」と、これも Intoxication、正気を失う。それから「あー嬉しい、しょっちゅう嬉しい」、これも Intoxication と、英語ではなるわけ。だから「心をいつも平静にしてください」という。そして、お酒を飲んで酔っ払って危害を加える、これはダメですね。それからマリファナをいっぱい飲む、吸う、これも Intoxication。これも善くないですね。

ところが、お経にこういうことは書いていないから。結局、たばこなんて経典に書いていないから、プカプカプカプカ朝から晩までマリファナを吸っていた。それからイスラームの方でも、お酒は絶対一滴もダメなのです。だから飲みません。ところが「Morphine」というのは書いていないから飲むわけ。「Morphine」というのは日本語で言えば「モルヒネ」。だから、結局「コカイン」とか「麻薬」とか書いていないから、「経典に書いてないから、飲んでも差し支えがない」ということになってしまう。

「このイスラームでは何でお酒を飲んでダメか」と言うと、AD 6世紀のペルシャのキングが神に約束したわけなのです、「もし私がこの戦争に勝ったら、一切、私はお酒を飲まない」と。ということから始まったわけです。というのは、ペルシャとか中近東では、酒は神の飲み物で、もうこれ以上のご馳走はないわけ。それで「これをやめます」と。それで最高のワインのツボをポーンと打ち破って、それからずうっと飲まないです。

だから今、中近東では、モルヒネの原料アヘン、タバコのようにプカプカ吸うでしょう。あれがそうなのです。それに、トロントとナイアガラの滝の間に小さな町の博物館があるのです。そこにたまたま私がふらりと入っていったら、1930年代の新聞があるのです。「この酒というのは最高の悪魔で、これほど悪いものはない」と、教会が先頭に立って撲滅する記事と、そのそばに、そのそばに「麻薬はこれほどよい薬はない」と、「体を休める精神安定剤だ」と。その麻薬の小瓶も、ちゃんといっぱいあるわけ。だから「誤解もほどほどに解釈し

てください」というわけ。

中国でお坊さんが肉を食べたら非常に変な目で見られる、台湾でもどこでも。中国の法源寺という、唐の時代から続いた大学の最高峰の教授が私に言ってくれたわけです。「実は中国では、もともと肉はお坊さんも食べていたのです。ところが、今から 1500 年か 1600 年前に内乱が起こって、少林寺のお坊さん、(少林寺拳法あるでしょう)、あのお坊さんがこの皇帝を助けたから、ここのお坊さんだけは肉を食べてもよい」と、「他のお坊さんは一切、食べてはダメ」というふうに皇帝が決めたみたいです。それから菜食。だから、南伝では、お坊さんは「頂いたものは何でも食べる」と、お釈迦様も食べることに對しては一切、何も言わなかったと。

ただ、お釈迦さまを破壊しようとしたデーバダッタ (提婆達多) は「生き物を殺してはいけません。植物だけを食べましょう」と、「デーバダッタの十戒」が非常に有名で、それで教団が破滅しそうになったようです。だって言うことはあれでしょう。「肉は食べてはいけません。殺してどうなりますか」。お釈迦様は食べるものに対しては一切、言わなかった。そして「衣は贅沢してはいけません」、その道に落ちている着物を縫いついで。だから、衣は、実はこういういろいろ縫いついでであるのです、一枚の生地ではなく寄せ集めで。そういうふうに寄せ集め。特に「死んだ人の衣を頂いて作りましょう」ということで「なるほど」と。「家に住むのもダメです」と。「樹の下で住みましょう」と。というふうに祇園精舎のお寺から出て行って、そのお寺がほとんど分裂しそうになったわけです。それで、お釈迦様はそういうことを言っていないわけ。結局そういう現実離れしたことに、私たちはよく酔うわけです。話に聞き惚れてしまう。これが Intoxication。

だから「浅き夢見し 酔いもせず」と「夢見し」、全て夢なわけ。だから、よく私たちは酔ってしまう、酔っ払ってしまう。だから、最高の酔っ払った現状の日本は、最初に言ったように福島原発。「これは絶対に大丈夫です」と。「これほど素晴らしいものはない」と。ということで、みんな国民は信じていたけれど、事故が起こった後で「これほど危険なものはない」と。なぜかといったら、モッサという燃料は猛毒で、再処理した燃料を使うらしい。これは非常に危険のものらしい。そして、このウェスティングハウス (ウェスティングハウス・エレクトリック) と GE (ゼネラル・エレクトリック) が日立と三菱重工かな? に払い下げて、アメリカではもう危険だから造らないわけ。日本に払い下げたわけ。そして、日本が造ったわけ。というふうに、完全に日本は「完全によいものだ」と、誰も彼もが信じきったけれども、今、アメリカの原子力委員会の 40 年間、勤めている No. 2 が「実は、これは非常にこれほど危険なものはないのです」と。結局、事故が起こって初めて分かるわけ。その前から言われているのだけれども、起こる前まではみんな酔いしれてみんな Intoxication。メディアに Intoxication。それから政治に Intoxication。「これはダメ」と。「心は酔わないでくれ」と。1930 年代のアメリカが「お酒だけはダメ」と。「麻薬は OK」と。非常におかしなことになってしまう。

無明である世俗の考え

それで私がよかったのは、仏国をずっと歩いてみて、あらゆるいろいろなやり方があるのだと。まず坐り方も「あ〜これで足の悪い人に教えることができる」と。それから「病気の人でもできる」と。「寝ながらできるから、悪くないのだ」と。「ただただ心が進化して、法に触れることができれば、三重丸だ」という考えになったのです。だから、カナダでは「坐れない人はソファや椅子でもよろしい」と。「それも駄目な人は、腰の痛い人は寝てもよろしい」と。というふうな、いろいろなバリエーションでやってみたら、やはり効果が出て、よくこれが飲んだことがない薬を飲めばすぐ治るみたいに、もうたくさんの人体が治りましたね。体を治すために教えたのではないのです。ただ法を教えるためにやったのだけれども、体が治るもので、次から次と来たわけ。またよく効くわけなのですね。カナダに行ったときは「いつこの瞑想会がご破算になりまして、自由になれるのかな」と思っていたら、いまだにずっと続いています。それで、そのうちどんどんどんどん進化し始めてね。

だから、最初に言ったように、お釈迦様が「無明とは〈これは私の妻、これは私の旦那さん、これは私の犬〉というふうに、これは普通の世俗の考え、これは無明です」と。本当の真理はそんなところにはないのです。でも、そんなことを言ったら社会が成り立たないから、でも、社会の波で今、全世界が統一された考えとか、あれこれと決められて、特にアフガニスタンの方には悪いのですけれども、悪口ではないのですけれども、彼らは真剣にイスラームの経典を読んで、そのとおりに信じ込んでいるものだから、「女は学校に行ってはいけない」と。その若い素晴らしい女性が鉄砲でポーンと打たれて、UN (United Nations : 国際連合) に「全ての女性に教育を与えてください。ペンと本とノートを下さい。教育だけが最高の私の未来に向かう道具です」と訴えたでしょう。今までそういうことを言う男性もいないわけ。命を張って行って殺されようとしたことで、全世界が「そうだ、そうだ」と言うことになって、この素晴らしいノーベル平和賞をもらうかもしれない女学生を、アフガニスタンのタリバンは「帰ってきたら撃ち殺す」というわけなのです。というふうに、1500年間、教え込まれたものだから、それ以外は考えられないわけ。

それで「最初の『クルアーン』(コーラン) の書いているものはアラビア語だけではない」と、「五つの言葉が組み合わさっている」と。それが、今これをイスラームの国で言ったら、私の首が飛ぶわけ。なぜかといったら「ムハンマドはアラビア語を使う」と。そして「ムハンマドが神から直接、聞いたことをアラビア語で言った」と。これがカイロ Text book になっていて、これがスタンダード。ところが、1972年、イエメンのサナア (Sana'a) というモスクワから715年前のText bookが発見されたわけ。それは絵に書いてある『クルアーン』で、いつの時代が大体、分かるわけです。ところが革に書くわけですね。革を分析した場合には645年、99%正しいらしい。それでX線に撮ってみたら、前に書いたものを全部、洗い流して、その上に書き込んだ『クルアーン』になるわけ。最初は「同じだ」と、大いに喜んだわけ。ところが、その裏に原本があったわけ。だから、今の『クルアーン』は、ほとんど書き換えられているわけです。ということで結局、自爆している。「これは神に捧げた命」と。

お釈迦様が言うのは「ここが無明である」と、教条主義で。本当の現実に関わなければ、

全てこれは無明の世界に入りますから、行く先は無明の世界に行きますと。「無明の世界」というのは、私たちの大宇宙があるでしょう、他の宇宙もあると。その間の中間にまたスペースがあるから、このスペースは絶対に滅びない、という無明の空間だと。そこに行きますから、一早くこの無明をやめてください、というわけ。結局、私たちは「では、何を信じたらよいのか」と。お釈迦様は自分の体を使って、すべて回答していったわけ。というふうに「私たちの体は、宇宙の叡智のかたまり」なのです。だから、今日も観たこともない現象をパッと観てびっくりしたと、それが入り口なわけ。

というふうに、想像を絶する仕組みで私たちはつくられているわけ。今、アインシュタインのことを言いましたけれども、アインシュタインの「 $E=mc^2$ 」「エネルギーは物質×光のスピードの2乗だ」。ということ固く固く信じて、全ての宇宙の構成理論が、それで作られてきたけれども、ロスアラモス国立研究所の実験で「これもどうも間違いがある」ということが今、発見され始めている。すべての哲学がここを基本にして作られたものだから、それで今、新しい哲学理論が一つも発生していないし、それまで作られたものが、これをもとにして作られているから。もう哲学が結局、政治の基本になるし、それから哲学が社会を動かす羅針盤だから。これが実は間違った情報をもとにしているのではないか、ということが今、分かり始めている。ということをお釈迦様が言っているわけ。

自分の体を指針とする—偉人たちの体感—

では、何を指針にして法を求めればよいのか。自分の体なのです。体は非常に大切です。お釈迦様は「自分の心が10兆くらいのパルスで動いている」と。それが何で分かったかと。光と自分の心を測定して、そこまで分かるわけ。稲妻がパッと光ったときには1/3秒くらい。それから追跡して行って、自分の心のパルスと合わせて、そういう結果を出したわけ。そこまで心はずごいものなのです。なぜニミッタ（丹光、禅相）かと言うと、「一切の障害を受けない仏の光」ということをよく言われるでしょう。「無量無辺、一切の障りのない光が仏の光である」と、ニミッタのことです。ニミッタは一切の障害もなく、スッと時空を超えて観るから。時空、時間も超えている。それで、この「道具」を皆さんが持っている。この「道具」で追跡していけるわけ。

それでは、これをどういうふうにして開発していくのかと。それで『サティパッターナ』。日本語では『四念処経』という経典に書かれているわけ。でもあんまり重要視されていない。というのは非常に難しい。最初はどこから入るか。「鼻の呼吸を観てください」と。「入った、出た」「入った、出た」これをアナパナサティ（入出息念）と。心でしっかり観るから、「マインドフルネス・ブリージング」、このことなのです。「鼻をただ観てください」と。それを今度「マインドフルネス」と、今度はまた分からなくなってしまう。言葉だけがひとり歩きして。ここがどういう状態になっているのかというのは、この『サティパッターナ』にお釈迦様が「七覚支」ということで最初、説明したように「ここが基本ですよ」と。

ところが、私がずうっと見た結果、偉い方が来て説明するのだけれども、訳された日本語が私の体験から解析したことと、それからクスマ比丘尼、この方はスリランカで『サティパ

ッターナ』の博士号を取ったわけ。その方の原文の英語と比べた場合には、この訳がちょっと違うわけなのです。また日本語の方も、やはり大事なところが、ちょっと抜けているわけ。やり方もちょっと抜けている。だから、そういうことが体験者だけがよく分かるわけ。「何が抜けて、何があるか」と。そして、体験者ではない人が書いた場合には、いくら偉い大学の先生でも体験がないものだから、間違っていないけれども、抜けていることがあるから、それで「先に進めない」ということになってしまう。

特に、ある素晴らしい仏教学者がもうやめて瞑想だけに入ったけれども、今から何年前のことかなあ、あれは。その弟さんもお坊さんで素晴らしい方で、もう80くらいになるのかな。そのお兄さんもすごい大学に行って、やめてしまったのだけれども。その人の本を読んだら、100万部にも及ぶ、この仏教の教学を一体どうして理解することができるのかと。この方はずうっと教学で来たからね。それでやめてしまって。もう次から次と論文が出てくるから。全部読みこなしていったら「これはおかしい」ということになった。実は非常に簡単なことなのだけれども、「四無量心」というブラフマ・ビハーラ (brahmavihāra : 四梵住)、修行してダンマヌパサナー (法随観) というお釈迦様の方法、それでやっていったら非常に難しいところなのですよ。

ところが、浄土真宗をやられている才市 (さいち)¹さんは、ただ「阿弥陀、阿弥陀」でいって、その文章²に書いてあることは、結局「吸う息、吐く息、心」これがアナパナサティ。それなのです。それで「慚愧は歡喜、歡喜は慚愧」³、ワーこの人は第三のムディター (喜) を体感している。メッタ、カルナー、ムディター。慈、悲、喜。捨はウペッカー。難しい。

結局、ベートーヴェン「交響曲第9番」で「歡喜」「Joy」を体感して音楽にしたけれども、その体感した本人は、その空間にいるわけ。結局、「法無辺」というふうに宗教・時空・国境を越えて、こういう人たちは歌にしたりして発表できるわけ。音楽を聴いていたらモーツァルトもすごい方で、私はそうだと思います。

それから、最もすごいのはバッハ、あの方は非常に禅的というか。チェロではないのだけれど、大きい楽器、ヴァイオリンではなく、世界的に弾く演奏家が、こればかりやっていて、それでふと気が付いてもうやめて、仏教の瞑想ばかりしている。世界をずうっと公演して、まだ若い人です。私が出会ったのは、40代前の人で天才的な人でポッとやめて、お父さんも数学者で、お母さんも大学の教授で、「君の名前はちゃんと家にあるから、いつでもドイツに行って尋ねてください」と。というふうに、そのお父さんは数学の先生で、この3次元の問題を4次元に入って解析して、それで戻ってきて回答を出すそうです。

だから、「無量阿僧祇劫の法門」というのは5次元なのです。今やっと5次元の世界が言われているけれども、私が『維摩経』の中の「無量阿僧祇劫の法門」(不可思議解脱の法門)

¹ 石見の才市 (1850-1932) : 浄土真宗の妙好人の一人。石見国大浜村字小浜 (島根県大田市温泉津町小浜) 出身。他力の信心を詠んだ念仏詩を8000首以上、残している。

² 「心は出入りの息にまかせて世を過すこと 出入りの息こそ南無阿弥陀仏」

(適宜、漢字を仮名、仮名を漢字に置き換えた。以下同じ)

³ 「わたしゃ罪でも六字の慚愧 わたしゃ罪でも六字の歡喜 南無は慚愧で 阿弥陀は歡喜 慚愧歡喜の南無阿弥陀仏」

を読んでワーンとショックを受けたのを覚えています。「こういう世界があるのか」と。それで今、5次元の世界が物理学、宇宙学で出始めました。

というふうに、仏教はすべての分野において、社会をリードし得るものを持っているわけ。実際 1500 年前に言われていることが。それが逆に科学を勉強していないものだから、組み合わせないで理解できないから、何か起こったら動揺して「どうしましょう」と。違うのですよ。逆にリードする立場にあるのに、なぜか逆についていくようになってしまった。その方が楽なのか、どういう状態になったのか。それで一切が今この日本で混乱して「実は一番、悩んでいるのはお坊さんなのですよ」と、私が 4、5 年前に来て言ったでしょう¹。この人たちが倒ればもうダメなのです。なぜかといったら 1500 年、2000 年の精神的な蓄積を持ちながら、それを発揮できないという。だから、こういう文献、宮澤賢治とか、すごい境地に達してしまうわけですね。

こういうことが一部の人ではなく、全ての方に広まって、自由に心が開発できなければいけないと思います。そのために日本文化は純仏教生活体系になっています。それを発見したのは韓国の靈鷲山通度寺という、ここに全ての仏教の法があるお寺なのです。韓国では最高峰なのです。そこで出された食事は純日本の食事なのです。それで「アーなるほど」と、全てあなた方が食べているのは、お寺からメニューをもらって食べているのです。そのレシピ・献立というか。ということを発見したわけです。日本という国は「仏法によって、国が組み立てられているのだ」と。だから、仏教をやろうがやるまいが、食べることによって、町を歩くことによって、全てその中で自動的に学ぶようになっている。

ただ、それが今、西洋的な考えが入ってきて「なんとか心理学」と言うけれども、仏教の心を観る解析は想像を絶するところにあります。なぜなら、心の仕組みがコンピュータみたいにターツと全部、観えるしね。これはどんな機械を使っても、現代は見えないです。それをアビダンマで詳しく解析しているわけなのです。アビダンマを勉強するのはよいのですよ。ただ、それはそれで、あとは体験してもう 1 回、読めば、素晴らしいことになるけれども。

ところが、体験しないで、そのまま入れた場合には、これが逆に障害になります。なぜかといったら、分かったつもりで何も分かっていないわけです。先ほど言ったように「アインシュタインの $E=mc^2$ 、絶対的」と。それから「イスラームの経典は絶対的」と。これをぶち込んだ場合には、次の世で大変なことになってしまう。分からないのに分かったことになっているから。もうこれで先がない、ストップ。だから「知識を入れれば入れるほどよいというものではない」。分からないものをボンボン入れたら、イメージ化して自分で分かったつもりになったら、もっと大変。「これは分からない」というのはまだよろしい。「分からないから言えない」と。必死になって勉強した挙げ句が「これが自分を破壊するものだ」となったら大変ですよ。もしそういうことをしたらそうなります。だから、間違った教えを受けたら、大変なことになるわけなのです。

¹ 『水源禅師法話集』第 3 卷 9 頁 3 行目以降参照。

仏法の偉大さ—お釈迦様、アングリマーラ、マハーカッサパ—

でも仏法というのはすごいもので、アングリマーラという非常に有名なアラハト（阿羅漢）が「1000人、殺せば涅槃に行ける」と、先生に教えられて、999人まで殺したわけ。それで全部、小指を切って首にかけてね。最後、殺す人がいなくなったから、お母さんがいたからお母さんを殺しに行こうとしたら、お釈迦様がさっと出てきて止めたわけ。というのは、この人は人を殺してもう極悪人だけれども、それを教えた先生を、ただ純粹に信じたおかげでやっているわけ。お母さんを殺せばもう二度とふたの開かない処に行ってしまうと。無間地獄（阿鼻地獄）。それで、お釈迦様がさっと出てきて、止めて諭した。そしてこの人が阿羅漢になったわけ。それで涅槃に行ったわけ。だから地獄に落ちないわけ。という法を持っている。「では、殺された人間はどうなるのか」と。「損じゃないか」と。「極悪人が天国に行つて、殺された人間が大損じゃないか」と。そうではないのです¹。

お釈迦様の素晴らしい話を夢中になって聞いていたあまり、ある人が間違つて、カエルに杖をついてしまつて、カエルがギャッと死んで亡くなつてしまつた。けれど、そのカエルは天界に行ったということ。そういう阿羅漢を見つけて、コップ一杯の水を上げたら、大変な大金持ちになつてしまつた。

あの有名なマハーカッサパ（摩訶迦葉、お釈迦様の二代目）²という方がいて、清貧で絶対に金持ちからはお布施を受けない。いつも貧しい人のところに行つて、お布施を受けるわけ。そして、この方は教団に入つて結婚しているのですね。奥さんもお坊さんになつて、教団に入つて、ところが一回も夫婦として寝たことがない。この方は梵天から降りてきて、この行をやっているわけ。また奥さんも梵天にいて降りてきて比丘尼になつたわけ。マハーカッサパは結婚したくなくて、大金持ちの息子で、お釈迦様のところで修行したいわけ。そこら一帯の超大金持ちで「息子が後を継がなければ、大変なことになるから」と、お父さんがもうしつこく言うものだから。マハーカッサパが「お父さん、結婚するには条件があります」と、パッとすごい神力というか、像を作つて「こういう方がいたら結婚しましょう。そうでなければしません」と。召し使いがサーッと行つたら、この人を探し当ててきたわけ。それで「なんだかんだ」と、理由を付けて、「ちょっと修行したいから」と言つて、お釈迦様の僧院に入つて、そのままそうしたら、この奥さんも入つて比丘尼になつて、同じところで修行したそうです。

ずうっと修行をした方で、この人は貧しい人のところからしか受け取らないから、お釈迦様が「何でお前はそんなに差別するのか。金持ちのところにも行きなさい」と怒られるくらい。この人はある農家のところに行つて、貧しい農家のお百姓さんが自分の昼飯をお供えしたわけ。その後、全部、金のとれる田になつたと。王様が喜んでしまつて「よし、お前、よいことをした」と、勲章を与えて送つて、王様の家来が金を取るのだけれども、全部、土になるわけ。仕方がないから「そのお百姓さんに勲章を付けて、位を上げて金を取つて来い」

¹ 『水源禪師法話集』第17巻「アングリマーラと菩薩行」（28-30頁）参照。

² 大迦葉（Mahā-kaśyapa）尊者：釈迦十大弟子の一人。釈尊の死後、初めての結集の座長を務める。「頭陀第一」といわれ、衣食住にとらわれず清貧の修行を行った。

と。それが金になるわけ。それで「国が栄えた」と。という大変な神通力を備えていた方なわけです。

命懸けの仏教—水源禅師の求道体験—

私は、このマハーカッサパさんが大好きで「私は弥勒菩薩が出るまでは生き続ける」と。「500人の阿羅漢を招待して、私がこのヒマラヤの山に入りますから」という伝説というか、経典に書いてあるわけなのです。この山を探すために、ずうっとチベットの山を私は命を落とすところまで探しに行ったわけ。どうもそれらしきところに着いたのだけれどもね。チベット人に聞いても分からない。誰に聞いても誰も回答できない。北京大学の仏教の研究者の人に調べてもらっても分からない。壮絶なストーリーでカイラス山を回って、いったんラサまで帰ったけれども、ある人の話が頭に焼き付いてもう1回、戻ったわけ、とことことカイラス山に。行ってくるだけでも大変なのに、もう1回、戻ったわけ。どうもそれらしき山に出会って、今でもちゃんと坐っているらしい。その写真もカンボジアで見せてもらったわけ。その写真はカナダの私のお寺と、今、死んだカンボジアの王様 シハヌーク殿下の側近の大比丘様が持っています。だから、いつもシハヌーク殿下が旅行するときは、アドバイザーとして彼と一緒に旅するわけです。北京でもどこでも。神通があるから観えるからね。それで、そのお寺に1枚写真と私の寺にもあります。この写真と話を手掛かりに、中国に行ってみに行ったわけなのです。

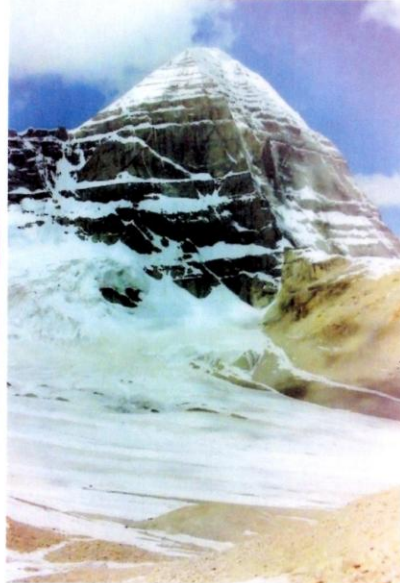
というふうに、仏法というのは、私の場合は、そういうふうに命懸けでずうっと進んでいったわけ。そういうことで、いろいろな素晴らしい法に出遇ったのですね。そこのカンボジアに行ったおかげで、このパオに行けて、ダンマヌパサナー（法随観）をもらって、そしてスリランカに行って『サティパッターナ』。結局「この『サティパッターナ』以外に涅槃には行けない」ということを韓国で出会ったマハシのお坊さんから聞いたわけですね。20年間、行をやって非常に立派な方で「いや、そうなのか」と、この本を探し当てて、そうしたらクスマ比丘尼が「いやそれは私の博士論文で、私が一番よく知っています」という、その原本をもらったわけ。それで、今その中で一番大切な「七覚支」を今回の合宿で皆さんに説明したわけなのです。「七覚支」は書かれているけれども、ただすらっと読むだけで、漢文で何も分からないと思いますよ。体験した人は、そここのところはよく分かります。でも、いまだに日本には明快に書かれた文献が一つもないですね。書いた人はいますよ。書かれた文献はそれらしき、でもやはり体験がないものだから、分からないのですね。それを分かったつもりで頭にインプットしたら大変なことになるから、まあそれはそれでと。あとは自分で追跡していくと。ということで「ここが非常に大切です」と。

孔



東面の岩に観音の姿

家



カイラス山 東面

字



高山植物

水源禅師が登って撮影されたカイラス山
(2012年忍野合宿での配布資料)

言葉にとらわれる恐ろしさ

そうでなければ、今の中近東みたいに大変な状態でしょう。でも、この人たちもまた大変。というのは、それを信じたおかげで過去1000年以上、取り返しがつかないことになっている。「あるべきものがない」ということになる。というのは、その原本の本がドイツで20年間、研究されて、そして発表したのだけれども、今度はイスラームの人が「これはアマチュアが書いた偽物である」と。ところが、なんと立派な大学の教授がドイツで20年もかけて研究されて、言語学者が調べ上げたもので、X線を通して調べた論文で書かれているし、学術的にはもう揺るがせない。ところが「宗教的には、これはもう話にならない」と。というふうに、徹底的、反対運動になるわけ。つまり、自分の地位、名誉、教会とか物を守るために「本当でないものを本当である」と続けた場合のことが、今、現実になっている悲惨なこ

とになっているわけですね。イスラーム同士が戦い殺し合い、それでカッザーフィー（カダフィ）という独裁者を倒して、これから素晴らしい民主主義の国ができると。なんと、そのときはホテルもあり、発電機器もあり、水道もあり、みんな車を持って、みんな大学とか行けたのに、今は皆目ゼロ。ただ殺し合い、殺し合い。

というふうに、言葉に依ったおかげで、ツケが払わされる。だから、精神界をやられてしまえば、こういうことがいくらかでも発生してしまいますね。その精神界というのは、もちろん、それを指導する方たちも大切ですけれども、在家の方たちも熱心に自分なりに研鑽してやっていけば、この力がまた反映して、やっている方と、また聞く方と交換して、善い方向に行くかもしれません。それを「こうだこうだ」という敵対ではなく、「いかにして皆さんが善い方向に行くか」と。「これが仏道の正道だ」と、私は思っています。

質疑応答

仏教に出遇ったバッハ演奏家

【参加者】

最初のヴァイオリンか、楽器をやっていた人¹が、急にやめて瞑想に入ったということで、『ダンマパダ』（『法句経』）の「つまらぬ快樂を捨て、大いなる楽しみを得よ」²という言葉を出したのですけれども。

【水源師】

それではなく、彼は世界的に有名なチェロかヴィオラの世界的なバッハ演奏家で、これしか弾かないで、全世界をツアーしているわけ。アメリカとかドイツ、全ヨーロッパとか。30代の方で。仏教に出遇って全部捨てて、ただ瞑想の世界に入った。今でもやっているという。お父さん・お母さんに全く余裕があるということもありますけれども。「つまらない」というばかりでなく「本当のことを知りたい」と。「これよりもっと大切なものがある」と。それで命を懸けるものを見つけたわけ。

だから、インド側のヒマラヤに7年間、行って、そしてパオに来て、私にいろいろなことをそっと教えてくれるわけ。いろいろな政治的な考えとかもあるから、表立っては言えないのですよ。だから、宗教をやって、そういう崇高なところでも、無明の考えが強い方がたくさんいるからね、だから、よほど気を付けて修行をしていかなければね、大変なことになります。「形にとらわれて、本当のことを知ろうとしない」という人の方が、大勢にして多いのです。なぜなら、そちらの方が楽だから。そのとおりにやれば分かったものと。問題ないしと。そういうことでしょうか。

間違ったことを教える人も信じる人も大変なことになる

【参加者】

ミャンマーのパオで、瞑想道場、お寺の生活の基本的なサイクルというのは、今日のリゾート（合宿）みたいな、朝から晩までずうっと瞑想しているような場所もあるのですか。1日中ずうっと瞑想しているわけですか。

【水源師】

そうです。だから、それをサポートする社会というのは、すごいものですよ。瞑想、忙しいですよ、教科があるから。外国の人は英語の先生が一人しかいないから、全部そこに行っ

¹ 9頁本文・下から8行目以降参照。

² 「つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを見ることができるのであるなら、心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ」（中村 元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』）

て学ぶけれども、「現在は二人」と言うけれども、ウ・コヴィダさんぐらいしかいないはず。あとはミャンマー語だからね。ミャンマーの先生は、いっぱいいるはず。

【参加者】

写真で見たことありますけど、大きな道場でみんなが坐って。

【水源師】

あれは坐る場所があるわけです。「ここ、ここ」と順番。そこに行って朝から晩まで坐る。食事のときは帰るとか。他のことをする時間はないです。本を読む時間もない。だから私の場合はよく怒られて「パーリ語を勉強していないのか」と。本を読む時間もあつたものではない。ただもう大急ぎでサーッと。瞑想、瞑想、瞑想。

【参加者】

それでもなかなか皆さん通過できないわけですね。

【水源師】

できないですね。やっぱり心の問題で。結局、私のことで、今でも伝説になっているみたいです。大騒ぎして、私が突然、現れたものだから。結局、今まで誰もいないみたいです。外国から来てそんなことをした人は。それで仰天してしまって、特にあちらでは、中国とか韓国では命を懸けたお坊さんたちで、何 10 年やっている人が、ごろごろ来ているでしょう。それをポーンと追い越して、スッと行ってしまったものだから。私の弟子が、こう言ったけれども「いやー、先生あなたはスターでしたよ。あなたのことはみんな見ていた」。だから、道路を歩いていたら村人が「オー、こんにちは、あなた瞑想なかなかできるそうですね」と。私は何も言っていないのに、もうダーッと噂なるみたいです。前代未聞のことが起こったみたい。だから、今でも噂になって、当時いた人はすぐに駆けつけてきてね、「いやー！」と。

だから、ウ・レヴァタ先生が真夜中、普通は寝るのだけれども、サーッとすぐドアを開けて、今度も討議し始める。彼とはもう 3 回目の談義だからね。第 1 回目もみんなの前でダーッとやり合って、2 回目、3 回目。結局、「法をどういうふうにして伝えるか」という本題に入ったわけ。それで彼も「分かりました」ということで。

ただ一番、残念だったのは、パオセヤドーと直接、話したときに、現状、日本でどういうふうにして教えられているか、事細かに話せばよかったのだけれども、「これはどうか」と。と言えばよかったのだけれども、私のことだけ言って「私の教え方はこれでよろしいのか」と。「はい、それでよろしい」と。「密教もマハーヤーナ（大乘）もテーラワーダ（南伝）も、実は同じくなっていますよ」、「はい、そのとおりです」と。それをそばで聞いていた人は、みんなびっくりして。結局、私が何を言っているのか、パオセヤドーは分かるわけ。まあ、それで十分だからね。それを事細かに言ったら、全て解明できるのだけれども、私のことだけだから、あと教えることだけだから、それ以上は聞かなかったけれども。今度、会ったら事細かにずうっと全部パオのやり方、「これどうなっているのですか」ということで、聞いて

みようと思いますけれども。

だから、パオではみんなを教えている前に、すぐにスッと通されて、呼ばれてすぐサーッと話をして。私が来るのを伝えられていたから、待っていたみたいだけれども。そのときのパオの重要な重鎮たちと全部、会っている写真を今度、ホームページ（『エカヤーナ ビハラ | 水源禅師』「写真」ミャンマー2013）の中に載せますから。ずうっと見てください。



水源禅師とパオセヤドー



水源禅師とヤンゴン第一別院（スタンレパーク別院）の長老



水源禅師とマレーシアのクアラルンプール別院の長老
(ヤンゴン川のビハーラ〈寺院〉で撮影)

というふうに、なかなか本当のことは伝わりにくい。少しだけ本当のことが伝わって、それはそれでよいのだけれども、それが大きく誤った方向に行った場合には、信じた人たちが大変なことになります、さっき言ったアングリマーラみたいに。仏教者として、それを見て見ぬ振りした場合には、これは私も大変のことになる。言って「聞く、聞かない」は別として、どういう状態にあるかは、ちゃんと皆さんに言わなければいけないけれどもね。何も言わなければ、波立たずに素晴らしいでしょう。

でも、福島原発みたいに起こった後でどうなりますか。これはそれ以上のことなのです。そう簡単なことではない。無量永劫に続いていくから。この現世だけではない。ということは、もしそういうことを無明の考えでやっているとしたら思えない。結局、自分の過去世も未来も実は観ないから、そういうことができると思う。観たら絶対できない話。一つの間違ひも起こせない。だから、十二因縁で過去を観る必要がある。それが必須教科だからね。それを観た場合には絶対に人に間違えだけは起こさせられないですね。特に誤った考えは絶対にできません。自分が死んだ方がよいくらい。何の意味もない。間違ったことを教えて、無量永劫、何のためにそれをする必要があるのか。

ウォールストリートの超大金持ちたちは知らないからやっているのだけれども、仏教徒としてこれをやれば大変ですよ、どの宗派においても。だから、指導者たちは絶対に十二因縁を観る必要がありますね。どういうことになるかと。そうしたら、間違ったことは教えられ

ない。だから昔、私がお寺に行ったときは「地獄絵」を見せられるわけ。あれが嫌でねえ、もう。「いやー私もぞろぞろっと地獄に行くのか」と（笑）。今はそういう写真は見せられないけれどもね。でも、結果的には、あれは私にとってよい教育でした。だから、白隠禅師という方が「地獄に行く、地獄に行く」ということで、必死になって禅をやったらしいですよ。それで悟りを36回やったと。

ところが、それでもしっかりした先生がいなかったものだから、禅病にかかったみたい。この禅病がまた恐ろしい。はっきり言って、禅病ほど恐ろしいものはない。本当におかしくなってしまうから。そこで、正しい先生に出会えるか出会えないかによって、大変な大違いになるわけ。だから、白隠禅師という、そういうもう地獄の底を通ってきて、禅病にかかってはい上がって来たものだから、本物になるわけ。

この方の言う素晴らしい「愛」ということについて話をしているのだけれども、「愛とはなんですか」「愛とはね、お父さんとお母さんの間に赤子が寝ているでしょう。その赤子のことなのですよ」。二つの愛を滔々と受けると。その間に寝ている赤子、それが愛ですと。というふうに実体験でパーッとと言えるわけ。だから、こういうふうにお釈迦様のメッセージを皆さんは今、聞いていますから、そういう無明の世界には行きませんね。もう全て法をずうっと聞いて体験しているから。そこはもう通過していますから。

次の世で善い世界に行くために—無明に惑わされず、全て自分で検証する—

ただ、次の世でどこの善い世界に行くかという問題。「それは何か」と言ったら、やはり瞑想でどんどんどんどん進化していくと。私たちがすごく幸せなのは「仏法というのは宇宙の華」で、いつも花みたいに咲いているわけではないのです。咲く時期があって、その咲く時期に出会っているわけなのです。

だから、太古の歴史を調べたときには、やはり「super civilization」（超文明）と言って、宇宙の彼方にも行くし、原爆も持っているし、そういう超文明が発生しては滅亡、発生しては滅亡。なぜかといったら、結局、心の問題で、王国同士が戦争し合うわけなのです。宇宙船同士が撃ち合って、4 万年前の『ラーマーヤナ』という経典に書いてあります。それは4 万年前の話らしい。それで「この地球には三つの空中都市があった」と。あの『スター・ウォーズ』ではないけれども、本当にあったらしい。それが戦い始めて全滅して。

エジプトの郊外に行けば、エジプシャンガラスと言って、グリーンの綺麗なガラスがあるのですよ。このガラスは砂が溶けてできるのだけれども、アメリカのネバダで原爆を地下爆発させたら、同じものができるそうです。それ以外できないみたいです。ということは、遠い彼方に核戦争をやったわけ。そのエジプシャンガラスは放射能がないのですよ。遠い彼方、原爆だけによってできるガラスなのです。すごいプレッシャーと熱とそれだけによってできるらしい。それ以外はできない。グリーンガラス、とても有名です。それがエジプトのずうっと砂漠の郊外に数100キロに渡ってダーッと散ったわけ。

南米のチチカカ湖のそばにあるティワナクという遺跡があるのですよ。そこはまあ何年前か知りませんが、私が思うに桁外れの昔なのかもしれないし、造ったものを見ると大

した技術でもないと、そういうふうに見えるのだけれども、そこには黒人の顔がある、白人の顔がある、東洋人の顔がちゃんと刻まれているわけ。それで、そこにはダイオライト（閃緑岩）と言って、ダイヤモンドでしか削れない非常に硬い巨石でできているものが、たくさんあるのですよ。プマプンクと言って、全部それでできていて、それも精巧に、ただ積み合わさっているのではなく、裏表からがっちり組むように切られているわけ。現代でもできない、石の削り方なわけ。なぜかといったら、ダイヤモンドチップでしか削れないし、巨大なものの中には 200 トンもあるわけ。その昔、それがずうっと城壁でできていたらしい。それがボーンと巨大な爆風か何かで吹っ飛んで、チリチリバラバラになっている。

というふうに、太古のエジプトの物質的なことと、『ラーマーヤナ』とかティワナクの現場に行くと、ドリルで小さい穴を開けているような石細工なわけです。手では切れない岩石ですね、ダイオライトと言ってダイヤモンドでしか切れないからね。道具も鉄では切れないのだから。不思議なことに、インカには鉄道具がないのです。数 100 トンもの石が吹っ飛んで、そこら辺にバラバラになっていると、プマポンク。そういう『ラーマーヤナ』のストーリー、エジプトのグリーンガラスと。そういうふうに、今は総合的に考えているみたい。

私が紹介した『ニップール・タブレット』（『Nippur tablet』）、1 万年前にも微積分が書かれているとか。それから、プラトンの言った政治論がちゃんと書かれていると。政治というのは四つの仕組みがあると。「王国制」「独裁制」「民主制」そして、「商業政治」。現在、今、「商業政治」に入っています。結局、ウォールストリートのバンカー（銀行家）が全部、握っているでしょう。こういうことが 1 万年前のタブレットの情報で書かれているわけです。だから、新しいものは新しいように見えるけれども、繰り返し、繰り返しで、何も新しいものはないわけです。

昨年はある石に全ての情報が押し込められていて、今チップスがそうでしょう。これが 50 年前「石の中にどうしてそういう情報が書かれるか」と。それを解析した話を去年、少し話したのだけれども。常識では到底、考えられないことが、現実にはたくさん起こって、ホワイトハウスのセクレタリー・アシスタントが「宇宙船に 400 兆のお金が流れている」とか。私が作り上げたことではなく、ちゃんと新聞に載っているのです。「この人が言った」と。名前まで挙げたように。

「ホワイトハウスのペンタゴンのそういう会議で、私たちが秘密を守れたのは、たったの二つだ」と。「〈宇宙人と宇宙船のエリア 51 のこと〉と〈フォート・ノックス（世界最大の金保有貯蔵庫、米国国防総省の管理）に金塊がない、空っぽである〉、この二つだけだ」と。という話をしたでしょう。だから「人造燃料テクノロジーを隠しても無駄ではないか」と。「そういう会議で全部流した」と。ということは、ちゃんと載っているわけ。ホワイトハウスの中で会議に出た本人が言っていますからね。というふうに、現実には到底一般のメディアでは考えられないダイナミックなことで起こっています。

平々凡々と淡々と自分だけ法を求めていけば、必ず次の来世で善い処に行くからね。ただ、私がこう言うのは「無明に惑わされないでください」と。ということで発表しているだけです。だから、実はそうであっても関係ないわけでしょう、自分だけの平安・幸せがしっかり

していれば。ところが「一般に言われていることが、全て本当だ」となったら、アングリマーみたいになって、お釈迦様みたいに出てきてくれて助けてくれたらよいけれども、そういうチャンスはほとんどないから、全て真に受けて頭に入れてやる場合には「それが本当であるかどうか全く保証がない、ということが正しいです」というメッセージを送りたいし、お釈迦様もそう言っています。「全て自分で検証してください。世の中で言っていることは、ほとんど無明のことです」と。

常識は常識ではない

【参加者】

広島なのですが、家の近くに日本ピラミッドみたいなのがあって、弥生時代か、ちょっと分からないですけど、そこに昔、太陽石、太陽の光での鏡みたいなものがあるんですけど、行って見たんですけど、巨大な石があって、そこに捧げものをそこに置いて、その隣に観音様がまつられていて、すごくよいところだなと思って。

【水源師】

日本では「海中都市の与那国」ということが、あまり言われていないけれども、外国では非常に言われ始めているのですよね。「与那国の海中都市」(与那国島海底地形)。聞いたことがありますか。お城みたいな巨大な遺跡があるのです。スキューバを持ってこう、その写真とかビデオがあるけれども、「これは自然にできたものだ」というふうにみんな言われているけれども、あれは自然ではできない。壁とかベランダとか巨大にできています。ハーバード大学とか、そういう人を一番に出してきて「いやこれは自然でできたものだ」と、そういうふうに言うわけなのですよ。

私が1時間に渡って、アメリカ人が撮ったビデオをずうっと見ていたわけ。たった2, 3秒しかその場面は出てこなかったけれどね。その石にインディアンみたいな「羽をつけた顔」が彫ってあるのですよ。2, 3秒だけ。それを見せたら、もう全部この学説が崩れるでしょう。そういうところは絶対に見せない。それで、ある角度から見れば、完全に人間の顔で目があるのですよ。それも見せない。だから、沖縄にはその昔、すごい王国があったみたい。それが今100 m 水の下に沈んであって、今、世界中であちこちピラミッドが発見されているわけです。太古の昔、何があったか知らないけれども。

これは本当に趣味というか、遊びというか、興味というか。まさか、そこに羽を着けた、掘られたインディアンの顔があるとは、誰だって分からないでしょう。その1時間半のビデオの中で、たったサーッと2, 3秒くらいしかないから。なぜ、インディアンのそういう文化だと分かるかという、私がノースアメリカのインディアンと親しいでしょう。羽を着けてダンスするでしょう。ちゃんと見ているから、これはインディアン文化と非常に深い関係がある。まさにその削り方がそうなのです。羽といい冠といい。だから「常識が常識ではないのです」ということ。

水源禪師法話集 25

(2013年10月13日 忍野合宿)

2014年11月23日 発行

編集兼発行 一乗会